

方言のDNAから 日本語の歴史を解き明かす



文学研究科 言語科学専攻
日本語学講座国語学専攻分野 教授

小林 隆

Takashi Kobayashi

1957年、新潟県生まれ。東北大学で国語学を学び、東北大学大学院文学研究科博士課程に進む。国立国語研究所言語変化研究部研究員を経て現職。博士(文学)。ディスティングイッシュトプロフェッサー。

方言は共通語化によってどんどん消えていく運命にある。ところがよく観察するとそんな中でまだ元気に生き残っている方言もある。その象徴的なものに仙台弁『いすい』がある。目にごみが入ったような感覚、何ともいえない身体の表面で感じる違和感を表す方言だ。そこには共通語では表せないどんな微妙な意味が潜んでいるのだろうか。

私たちが古い時代の日本語を学ぶとき、『源氏物語』や『枕草子』といった文学作品を紐解く。平安時代の京都の貴族、しかも女流作家が文章を書くために使ったことばを資料としているのだ。しかし、そうしたことばが過去の日本語のすべてだろうか。文献中心の従来の研究に対して、方言学的な立場から、地理的・位相的に幅広い視野をもった日本語史の解明をめざすのが小林隆教授の研究だ。方言を探索することで、文献に隠された庶民の話しことばの歴史を掘り起こす。古い時代の日本語は決して死に絶えたことばではなく、中央から地方へ伝播することで、今でも各地の方言となって綿綿と生きている。ここでおもしろいのは過去の中央語がどのように変容して各地の方言に生まれ変わっていったのか、そのメカニズムだ。例えば『めんこい』。万葉集に出てくる「めぐし(愛し)」が語源だが、それが「めごし」「めごい」となり「めんこい」に。中央で一度消えた言葉が、東北まで伝播してかたちが変わる。しかも、意味まで東北独自のものに変化しているのだ。

方言は文化遺産のひとつであることは明らか。しかしあまりにも身近な存在であるために、多くの人がある大切さに気付いていない。しかも、日本の伝統的な方言は今や共通語化の波に洗われ、消滅寸前の状況にある。方言を記録し、後世に伝えるための時間はそう長くはない。小林教授は、全国2000地点調査を行うほか、今年も、学生たちと一緒に東北地方の方言調査に出かける。

「消えていく方言が多い中で感情や気持ちにかかわる方言は残りやすいんです。「いすい」はその代表格。逆に運動着の「ジャス」のように、宮城県限定で、方言だと気付かれてしまったために使われなくなってきたものもあります。」



東北大学国語学研究室では、1955(昭和30)年以降、学生たちと一緒に東北方言についての臨地調査を続けている。調査内容は、音韻・アクセント・文法・語彙といった言語の基本的分野の記述的研究を中心とし、方言地理学や社会方言学にも及ぶ。

小林教授が監修を務めた「仙台弁かるた」。仙台ロフトでも、ヒット商品となった。



方言調査でご協力いただいた方々にさし上げる方言絵葉書。全国2000地点調査では、すでに400項目を超えるデータを収集したが、その中から、「からだ」「お化け」「金持ち」などの絵葉書を作成している。

<http://www.sal.tohoku.ac.jp/hougen/>